

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■148■

「沼」という若者言葉

がある。意味的には「ハマ」に近いが、前者には、対象への執着から抜け出せない、というやや自虐的なニュアンスがあるように思う。

群馬が誇る文豪・田山花袋は、生まれ育った館林の沼について「追憶が沢山ある」と表現した。花袋の作品には沼が多く出てくる。キラキラする沼、錆鉄色の沼など、リアルな形容に強い郷愁が伝わってくる。

沼は、人工的に造った池と異なり、くぼみに水が流れ込んだり、川の変

「沼」について

流で水が取り残されたりして出来る。存在自体が遠い記憶を呼び起こさせるものなのかもしれない。また、竜神伝説など

館林で追憶を感じず

らアプローチすべく、尾曳の渡し船に乗った。畔に、私も学生時代に打ち込んだボートの艇庫が見えた。あまり知られていないと思うが、館林はボートの県内メッカなのだ。城沼の静かな水面を、ボートが滑る美しい光景が目に見えんできた。

花山公園のツツジは千

の東の玄関口ともいえ

沼があったとのこと。小さな沼は新田開発や土地改良などの目的で消滅したが、現存する沼は用水源として、穀倉地帯の館林を支えてきた。大正から昭和にかけて、群馬は小麦生産の中心地。利根川と渡良瀬川に挟まれた「川倉」にある館林は、河

分福茶釜の茂林寺。そこにある茂林寺沼の周辺には、湿原が広がっている。まちの喧騒から離れて、みずみずしい植物や野鳥が見られるのは、地方の豊かさだと思う。いまは八徳を持つと言われるタヌキの焼き物が、オフィスで私を見守ってくれている。

も多く、神秘的な存在だ。春の足音が聞こえ始めた2月末、多々良沼にオオハクチョウを見に出かけた。優雅だが筋肉隆々のハクチョウ。はるかシベリアから飛来してきたことに敬意すら感じた。

今月は満開のツツジの名所・花山公園へ。城沼か方史研究協議会によれば、江戸時代には16もの沼があったとのこと。小

川交通の要衝であり、製粉業などが発達した。舞鶴の首の部分は、群馬

宮 将史(みや・まさひこ) 1974年生まれ。神奈川県出身。一橋大経済学修士。2000年日本銀行入行、政策委員会室国会渉外課長などを



を経て24年7月から現職